



日本鋳物中子工業会
会長 鈴木 泰博

ごあいさつ

新年明けましておめでとうございます。令和7年よき新春を迎えられたことと謹んでお喜び申し上げます。また、日頃は当協会の活動にご理解とご協力を頂いておりますことに御礼を申し上げます。

昨年はコロナの影響も薄れ従来の工業会としての活動を行うことができました。7月には常任理事会を新潟で開催し工場見学も行いました。また、10月に広島で開催した定時総会ではマツダ株式会社の工場見学や室蘭工業大学の清水一道教授の講演などとても有意義な経験ができ、直接皆様と交流できたことを大変うれしく思っています。今後も多くの会員の皆様と情報交換や親睦を深めていきたいと考えています。

昨年の日本経済の状況ですが、ロシアのウクライナ侵略の長期化に加え、中東情勢の悪化など世界秩序が崩壊した状態で、エネルギー問題、為替変動などによる物価高騰など厳しい状況が続いています。また、私たち中小企業を取り巻く環境は、度重なる原材料の値上げ、エネルギー価格の高騰、受注量の減少、賃上げや労働力不足、カーボンニュートラル達成に向けてのエネルギー問題など多くの課題を抱えています。色々な課題に対してできるだけ多くの情報を発信し、会員皆様に少しでもお役に立てるよう活動を進めていきたいと考えていますので今後ともよろしくお祈り致します。

最後になりましたが、皆様方の益々のご繁栄とご健勝を祈念致しまして新年のご挨拶とさせていただきます。

日本鋳物中子工業会 会長 鈴木泰博

マツダ(株)鋳造工場見学会

2024年10月18日、広島県にあるマツダ株式会社の工場を訪問いたしました。今回の見学は、日本鋳物中子工業会の一環として、業界の発展を目指す重要な機会となりました。

マツダ株式会社は、自動車業界において革新的な技術を追求し続けており、特にシリンダーヘッドの鋳造技術において非常に優れた実績を誇ります。シリンダーヘッドの鋳造において、金型鋳造が一般的な製造方法である中、マツダ様は唯一、量産メーカーとして「砂型鋳造 (APMC)」を採用しています。この技術は、アルミ注湯がゆっくりと固まる特性を活かし、複雑な形状や薄い壁状の部品を鋳込むのに非常に適しており、従来の製造方法に比べて品質の向上や工程の効率化を実現しています。さらに、この製造方法により、後工程での熱処理が不要となり、工程の短縮にも貢献しています。



工場内では、最新の鋳造技術を駆使して高精度な部品を生産する様子を目の当たりにし、参加者一同、その技術力に驚嘆しました。特に、マツダの職人たちが持つ高度な技術と細部へのこだわりが、製品の品質にどれほど大きな影響を与えているのかがよく理解できました。

マツダ株式会社の皆様におかれましては、この貴重な機会を提供していただき、心より感謝申し上げます。

今後も業界の発展に向けて、マツダ様の優れた技術力を手本にし、共に成長していけるよう努めてまいります。再度、マツダ株式会社の皆様に深くお礼申し上げます。

第31回 日本鋳物中子工業会 定時総会 広島県広島市

2024年10月18日(金曜)広島県広島市にて定時総会が開催されました。現在の正会員総数74社、賛助会員総数15社、総会にご出席された企業様は正会員数22社32名、出席賛助会員数10社、15名でした。多くの方にご参加いただきありがとうございました。決算報告、来期計画などの議案は無事承認されました。

鋳造業界が直面する課題と未来への提言

一日本鋳造協会・鈴木晴光専務理事、第31回定時総会で力強い訴え一

日本鋳物中子工業会の第31回定時総会が開催され、日本鋳造協会の鈴木晴光専務理事は、業界が抱える課題とその解決に向けた取り組みについて力強いメッセージを発信しました。

鈴木専務理事は、価格据え置きや根拠のない値下げ要求が続く現状に対し、「これ以上の価格圧力に耐えることは難しい」と訴えました。特に労務費の上昇や人材不足が深刻化しており、「従業員が働きやすい職場環境を整えるにはコストがかかる。このコストを中子価格や鋳物価格に反映してもらわなければ、供給が立ち行かなくなる」と強調。お客様に価格改定の必要性を理解してもらうための活動を進めているものの、「現状ではその成果を十分に上げるには至っていない」と、課題の厳しさを語りました。

また、外国人技能実習生制度に関しても言及。「政府は再来年、この制度を廃止し、新たに『育成就労制度』を導入する予定だが、転職が自由化されることで中小企業にとって使い勝手が悪い制度になりかねない」と懸念を表明しました。このため、「制度を中小企業が活用できるものにならなければ意味がない」とし、政府や自民党の鋳物議連への働きかけを強化する考えを示しました。

さらに、制度の詳細設計に業界として積極的に意見を寄せる必要性を訴え、「皆様の率直な意見をお聞かせいただきたい」と会場に呼びかけました。

鈴木専務理事の発言は、鋳造業界全体が直面する問題を鋭く浮き彫りにするとともに、未来に向けた具体的なアクションの必要性を示すものとなりました。業界が一丸となり、厳しい現状を打破するための行動が今こそ求められています。

「素形材産業の未来を語る」—清水一道教授が講演— —高付加価値の追求と自動化の重要性を強調—

日本鋳物中子工業会の第31回定時総会后、室蘭工業大学の清水一道教授が「素形材産業における自動化の取り組みと、その効果～高付加価値の追求～」と題した講演を行い、業界の現状や未来への提言を語りました。

清水教授は、素形材産業が直面する厳しい状況に言及。ドイツを含む各国で工学部志望者が減少し、AI関連分野に人材が流れる現状に懸念を示し、「ものづくりの基礎となる素材産業を再評価し、小学校から教育を行う必要がある」と提言しました。また、鋳物産業の重要性を強調しつつ、「素材を制する者は全てを制する」という言葉で原点回帰の必要性を説きました。

講演では、島根大学での教育活動や、業界全体での協力体制の必要性も述べられました。清水教授は、「鋳物の生産数や企業数が減少し、このままではものづくりが立ち行かなくなる」と危機感を示す一方、「仕事をシェアする鋳物シンジケートのような連携が、生き残りのカギになる」としました。また、自動化の実例としてアイシンが注湯工程を自動化し、30人規模の作業を5～6人で実現している事例を紹介。「効率化と高付加価値化を両立させるブランディングが重要」と述べました。

さらに、カーボンニュートラルの影響による鋳物スクラップ不足や、新日鉄の高炉停止がもたらす課題にも触れ、「船舶や原発の解体などから高付加価値の素材を供給する新たなサプライチェーンの構築が必要」と提案しました。

講演の最後には、「既存の方法では未来は変わらない。望ましい未来を描き、そこから逆算して行動することが重要だ」と訴えました。清水教授の情熱的な講演は、参加者に業界の未来へのビジョンと挑戦するための勇気を与えました。